

Eureka XIII

六年制通信 No.31 令和8年1月8日(木)号

同じ毎日を懸命に過ごす

明けましておめでとうございます。元気で新年を迎えられましたか？

昨年の終業式で話したこと、実践できたでしょうか。除日に講は起こせたでしょうか。大晦日の夕日に手を合わせ、感謝の意を表せたでしょうか。元日の朝を希望とともに目覚めることが出来たでしょうか。麻生さんが人間にとって最も大事なこととして語った「朝は希望とともに目覚め、昼は懸命に働き、夜は感謝とともに眠る」という言葉は、私たちも大切にしたいものですね。

さて、始業式で話したことを書いておこうと思います。もちろん、これを書いている今は冬休み中ですから実際に話す内容と微妙に違うかもしれませんが。

いつも6年生の諸君には「勉強頑張れ、今の頑張りが後々まですっと心に残る。そして君たちを支え続ける」と言ってきました。大学入試の、いわゆる受験勉強の苦しさは、苦しいゆえに頑張りぬく値打ちがあるのです。共通テストは教科も多いし、得意な教科だけを勉強していればすむわけではないので受験勉強は本当に大変ですよ。共通テスト後の二次対策も、ぐっと難しくなります。しかし頑張りぬいてほしいと思います。君と同じように頑張った仲間が新しいキャンパスで待っていますから。

君たちに頑張してほしい理由をもう少し説明します。頑張る、頑張らない、合格、不合格、これらの組み合わせは四通りできます。①頑張って合格した。②頑張ったけど不合格だった。③頑張らなかったけど合格した。④頑張らなかったら不合格だった。このうち④は論外、というか正しい結果ですよ。①は嬉しいですね。君たちが目指すのは①です。②は辛いでしょうが、何らかの原因があったわけです。それらを検証することが出来るという点で、次につながります。少なくとも自分の「実力」がわかります。③は結果だけを見ればよかったと思うかもしれませんが、これが一番よくないのです。

残念ながら、君たちが特に頑張らなくても合格できる大学があることは事実です。つい先日英語教育のことで、とある大学の先生と話したのですが、大学によっては英検で言えば5級4級の学生がいるとのことでした。少なくともその学生さんたちは、英語に関しては確実に勉強していません。頑張ってこなかったわけです。これだけグローバル何とかと喧伝されている今、大学生として恐らく原書は読めないでしょう。こうした実力で大学生になると、つまり勉強を頑張らないで合格すると（そしてそこへ進学すると）、きっと自分の学校を好きになれないまま卒業することになると思います。もっと露骨に言うと、自分の青春を過ごしたキャンパスを軽蔑してしまうのではないかと心配します。そしてその経験は、後々まですっと心緒に残り、君たちを支える

どころか、何をするにしても足を引っ張るのではないかと思うのです。今からの数ヶ月を頑張れないと、合格しても不合格になっても、きっと後悔すると思います。

受験勉強は平等です。毎日懸命に取り組めば自分のことがよくわかります。何が得意で何が不得意なのか、自分はどのくらい集中力があるのか、記憶力はどうか、理解力はどうか、工夫をするのが得意なのかどうか、細かい時間を活用できるのか、計画性はどうか、体力があるのか、飽き性か、こういった自分の特性は受験勉強を通して知ることが出来ます。これが将来、必ず君たちを助けます。

学歴とは、いつも言うように、生涯にわたって学ぶ歴史のことですから私もまだ自分の学歴を終えていません。ですから君たちも大学入試の結果だけを生涯の学歴と考えてはいけないのですが、それでも今「頑張らないでも得られる結果」に甘んじることだけはしてはいけません。そこから真の学歴がスタートできるとは思えないからです。

四大綱のうち「ルールを守る」、「チームワークをつくる」、「相手に敬意を持つ」はどちらかと言えば集団の中で形成されるものです。ですからルールを守っていない、チームワークを乱している、相手に敬意を表していない、これらは他者から指摘をされやすいことです。しかし「ベストを尽くす」は「自分ではベストを尽くしている」のであって他者には自分のベストはわからないという理屈、というか言い訳を耳にします。だからこそ、「ベストを尽くす」というのは孤独な戦いなのです。究極的には自分にしかわからないのですから。毎日平凡に過ぎます。そんな中で緊張感をもって懸命にベストを尽くして生きる（勉強する）というのは、大変なことです。しかし、ベストを尽くした経験は、これから先の人生で必ず君を助けることでしょう。

今週のおすすめ

・堂場舜一 『コーチ』（創元推理文庫）

唐沢寿明主演のドラマも観ていました。実際の警察現場を知っている方だと「そんなわけないでしょ」となるであろうシーンは「コーチ」に限らずどの刑事ドラマでもあるでしょうから、そのあたりは目をつむって楽しみましょう。

舞台は警視庁。管理職になったばかりの若い女性警部補、取調官に憧れるものの被疑者に翻弄されるばかりの若い警官、体が大きくて尾行に向いていないと悩む警官、そんな彼らのもとに短期間派遣される向井巡查部長が主人公。彼とともに働くうちに彼らはどんどん脱皮していく。これからもっと向井に学びたいと思うのだが彼はすぐに人事二課へと帰っていく。まるで短期間の特別コーチのように。

それに彼らが向井について先輩たちに聞いても、何やら「向井」という存在はタブー視されているような感じ。向井に指導を受けた三人がチームを組んで、ある殺人事件を追うことになるのだが、それと並行して向井の過去を調べ出す。そして、悲しい過去を知った上でどうしても向井の、刑事としての現場復帰をさせるべく三人は向井に近づいていく。推理小説というより、私たちの年齢が読むと若手教育の書みたいに思えますね。ドラマでは唐沢さんがいい感じでしたね。

BGMは マカロニえんぴつ の パープルスカイ でした…。